

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第 6 回 相模原農業振興地域整備計画検討委員会				
事務局 (担当課)		農政課 電話 0 4 2 - 7 6 9 - 9 2 3 3 (直通)				
開催日時		平成 3 1 年 2 月 1 8 日 (月) 1 0 時 0 0 分 ~ 1 2 時 0 0 分				
開催場所		相模原市民会館 2 階 第 2 中会議室				
出席者	委員	1 2 人 (別紙のとおり)				
	その他					
	事務局	7 人 (農政課長ほか)				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	0 人
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
会議次第		1 開会 2 議題 (1) 改定後の農業振興地域整備計画案 (1 月 2 1 日時点) の修正について 資料 (2) 改定後の農業振興地域整備計画案 (旧市、旧城山町、旧津久井町、旧相模湖町及び旧藤野町) について資料 ~ 3 意見交換 4 答申案について 資料 5 その他 資料 6 閉会				

審 議 経 過

会議次第のとおり委員長が進行をし、進行に合わせ事務局から資料～の説明を行い、簡易的な質疑応答を行い、議題については意見交換を行った。

主な内容は次のとおり。(は委員の発言、 は事務局の発言)

2 議題 (1) 改定後の農業振興地域整備計画案 (1 月 2 1 日時点) の修正について

第 5 回検討委員会の結果を踏まえて、資料 P . 4 を修正したとのことだが、「相模原市鳥獣被害防止計画」の策定は、農業振興地域整備計画 (以下、農振整備計画という。) の改定までに間に合うものか。

1 月にパブリックコメントの募集を終えたところ。順当に進めば農振整備計画の改定前である 3 月中には策定できる見込みである。

2 議題 (2) 改定後の農業振興地域整備計画案 (旧市、旧城山町、旧津久井町、旧相模湖町及び旧藤野町) について

質疑応答は次項目である意見交換と併せて行った。

3 意見交換

資料 について、各地区の地域特性に言及されている。 P . 4 「第 1 農業振興の基本的方向」の「(1) 計画的土地利用の推進」でも、「地域特性や特色を活かした」というような言葉があっても良いのではないか。

地域の意見を聞きに行くと、様々な要望、意見をもらう。計画改定においても地域ごとに検討する必要があると感じているところである。

この計画は 8 ~ 1 0 年後を見据えたものと思うが、圏央道の開通があったり、リニア中央新幹線の駅ができたり、今後相模原市の都市像が大きく変わる時期にある。そのため 2 0 年後、 3 0 年後まで見越した布石を置かなければならない。その頃の中核となるのは今の中高生や大学生であり、今の中高生を農業とどう繋ぐかが大事。相模原市が農業のある街、自然のある街であるという意識を植え付けていかないといけないと思う。

先日も、中央区の中高生に「相模原市の都市像」についてヒアリングを行ったところ、新宿や品川のワイガヤの雰囲気や都市的機能も良いが、自然や農業が身近にあって、心が落ち着くような生活像のある相模原市を望む、という意見が出た。資料 P . 5 (7) で農業の多面的機能の活用や多様な主体との連携に言及されているが、今の中高生などとの連携について対応してもらえると良いと思う。

若い人にも受け入れやすいような表現を検討していく。

「旧相模原市」や「津久井地域」のような言葉が出てくるが、合併後の計画の統合であり、これからの相模原市の計画書であることを考えると、例えば緑区、中央区、南区といった表現の方が適切ではないか。

地域について記述する際には、何区という表現では適切に表現しきれない部分があるため、表現については今後検討させていただく。

「農業体験学習」も計画書に頻繁に使われている。これについてもP. 4「第1 農業振興の基本的方向」に記載があっても良いのではないか。

現在でも、下大島における農業体験の受け入れや、相原高校と相模原市農協の連携協定などの取り組みがあることをお伝えしておく。

資料 P. 14 について、「農業生産基盤」という言葉が使われている。製造業では研究開発、生産、流通の大きく3つに分かれ、生産基盤というと工場を指すので、生産基盤の強化という表現には違和感がある。

それよりも、研究開発の支援として、例えば新しい品種、新しい種、新しい栽培方法などの導入に対して政策的な支援があってもよいのではないか。

また、例えば相模原の農業のPRなど、流通基盤の方策も明記する必要があると思う。相模原市内産の農産物が何かあまり知られていないものと思う。その中では、ホームページを作るだけでなく、試食販売や農地を巡るツアーのような積極的なPRに力を入れる必要があるのではないか。

先ほどのような、今の中高生との連携について、資料 P. 31 第7の農業を担うべき者のための支援の活動や、同じくP. 30 第6の農業近代化施設のうちの農業研修施設の中に位置付けることができないか、もう一度検討してほしい。

農振整備計画の対象は生産基盤等のハード整備が主であり、別途策定している市独自計画の『さがみはら都市農業振興ビジョン2025』でブランド化など販売面について扱っているところである。

ブランド作物については、現在もやまといもや津久井在来大豆、ブルーベリーなどに取り組んでおり、直売所マップも昨年度更新したところではあるが、もっと取り組みを広げていくため、来年度予算の増額を要望しているところである。

ブランド化の内容としては、農協の方が農家や農地など現場に近く、また大型直売所が出来たことで消費者にも近いものとなっているため、農協に検討をお願いしているところである。

農振整備計画の改定案には「高齢化」や「担い手不足」という言葉が使われてい

るが、「収益が上がらないから担い手がない」、「あまり儲からなくても困らない高齢者が担っている」というのが実態であり、それらの本質が隠されてしまっているように感じる。

地域に農地がある景観の保全や食料自給率の改善など、農業者だけでは解決できない問題については、国が対応すべきことかも知れないが、国に任せるのではなく、自治体でも取り組んでほしいと思う。

農地の「保全」「活用」という言葉が多く使われているが、実態としては難しいと思う。

計画の「内郷東地区」にあたる寸沢嵐に住んでいるが、自治会に加入している約170軒のうち、引っ越してきた人が半分以上、農地を持っている人が24～25軒である。農地を持っていても、耕作できているのはそのうち12～13軒で、耕作と言っても自家用野菜を自宅に近いところでやっているだけである。さらに、耕作している人は、40代が2～3軒はいるものの、ほとんどが80代で、代替わりしたらもうやらなくなるだろう、という状況。

また、できた野菜を周囲に配ろうとしても、スーパーで買うからいらぬと言われてたり、白菜にしても漬物は塩分が高く作らぬからいらぬと言われてたりという状況である。

農地の利用については、8割ほどが農用地区域となっており、子供が住むための家を建てようにも建てられない。

これらの問題が重なり、自治会が成り立っていない、として自治会でも問題にしている内容である。

都内の知り合いを訪問する際、津久井在来大豆の納豆や蒸かしたものを土産に持っていくと、また持ってきてほしいと要望される。ブランド化の話としては、そういう地道な活動も必要かと思う。

農業体験学習の話が出たが、学校が土曜休みになってから、(授業時間確保のため)体験学習のために使う時間がない。一方で、自分の親族も、3歳の時くらいにタケノコ掘りやエンドウ豆の収穫などを経験していたためと思うが、大きくなってからも野菜はスーパーではなく農協の支店で買おう、と言っているのを聞く。そのため、幼少期の体験学習は、学校の時間がとれず実施にあたって課題はあるものの、効果があるものと思う。

普段から農業をしているが、農用地区域にも道をはさんだ向かいが住宅というところもある。その場合、土埃や農薬の飛散を気にしながらやる必要があり、市街化区域の農地と同じようなものである。現況を見てもらい、そのような土地につ

いては、必ずしも保全でなくても良いのではないかと思います。

資料 P. 5 に、「規模拡大を進め、収益性の向上と余暇時間の増大を図る」とある。特に新規就農者は確かに365日働いているように見え、その方向性自体は良いと思う。しかし、例えばスーパーの産直コーナーに並べるため、洗って袋詰めした野菜を朝から各スーパーを回り、陳列し、値札つけとやっているとな午前中は農作業ができない、というようなことが実態としてあり、集荷、配送の仕組みが必要とされているものと思う。集荷の仕組みがあれば、農業者にも余裕ができるし、さらに耕作に打ち込めることになると思う。

今回の整備計画に載っているような建物などの施設だけではなく、スプリンクラーなどの灌水施設が必要だと思う。灌水施設があれば、夏場に作れる作物も増えるなど農地の魅力が高まり、そこで耕作する人も増えると思う。

直売の方式では、売れ残りの回収もあり時間が取られる。かつては市場へ出荷していたが、市場なら朝持っていけば、帰って一日仕事ができる。

市場出荷は農振整備計画で言及されていないが、今はあまり行われていないのか。

確かに市場出荷は減っている。市では野菜生産出荷奨励金を交付しており、手元に詳しい数字がないので正確なところはわからないが、約20年前は奨励金の予算が300万くらいの規模であった。今は、補助率が下がっていることもあるが、3分の1くらいの規模になっているものと思う。

農地は相続に際して減っているものと思う。農地を売らないと相続税が払えないという実態がある。何とか対策できないものかと思う。

小学校の農業体験は、熱心な教員がいるうちは続くが、教員が変わると続かないこともあり、難しさがある。

望地河原でお米の農業体験学習を受け入れているが、親子で参加できるイベントとなっていることは、農業を守っていくためには良いことだと思う。今後も続けていきたい。

これまでも同様の発言をしたが、具体的な話はこの検討委員会の委員だけではなく、他に地域の人からの意見聴取もしてほしい。また、農用地区域に指定されていない農地も含めて、どう保全していくか意見を聞いてほしい。

中山間地では、明らかな条件不利地があり、必ずしも全ての農地を保全の対象としなくても良いのではないかと。

相模原市は消費地に近く、販路を作るのは難しくないが、物流の面に難しさがある。集出荷施設などはあると良いと思う。

青野原は特に高齢化がシビアな地域である一方、都会に近い田舎として魅力があり、移り住んで本当に良かったと思っている。同じように感じる人や、兼業までいかななくても、半農半Xのように少し農業をやりたい人などはいっぱいいると思う。うちでは農作業のパートを雇っているが、農作業を体験したいという人も受け入れており、そういう人は一日作業を手伝って本当に喜んでいる。

地域の人口減少はやむを得ないことなので、都市部に住んでいて農業に関わりたいと思っている人と農業者や農地とを結び付けていくことが大事である。

取れたての野菜が新鮮でおいしいとか、農業体験したいとか思っている人がいても、その人たちが必ずしも地域の農業者や農地、その情報と結び付いていないという状況がある。従来の考え方ややり方ではうまくいかなくなっていると感じる。働き方だったり企業のスタイルだったり変化の過渡期にあり柔軟に物事を考えていく必要を感じる。また、本日の会議でブランド化の話があったが、相模原ブランドの宣伝が、地域の特色についての情報発信につながるものと思う。

うちの娘も小学生の頃、学校で農業体験学習があり、鉢植えでピーマンやナスを育てる程度であったが、たまたま地域の農業者に声をかけてもらい芋掘り体験をさせてもらったということがあった。子供はそういう実際に土をいじる体験を求めているものと感じる。例えば教育委員会との連携など、農業体験をしたい人とその機会を提供してくれる人を結びつけるような連携があると良いと思う。

本日出た意見は農協にとっての課題である部分もあった。今後も引き続き市と連携して取り組んでいきたい。

農業で食べていけるほど稼ぐには相当な生産量が必要であり、どうしてもある程度の規模の農地や生産基盤が必要である。とにかく農地を守る、という姿勢も必要だと思う。

今回の計画では、農業を担うべき者の育成・確保施設は具体的な計画はなかったが、集出荷施設の整備と合わせ、今後の展開に注目していきたい。

市の予算の事情もあるのかもしれないが、整備計画の縮小廃止ばかりではなく、もっと積極的な整備を検討してほしい。中山間地においても、少し農道を整備すれば借り手がつくと思われる農地もあるので、そういう農地がどこか地域からの意見を聞いてほしい。

相模原市は合併により市内状況が多様化した。農業においても地域性の多様性もあれば、農業に関わる人についても専門だけではなく、農業をやってみたい人や高齢者、障害者、というような多様性がある。合併によって多様性を活かせる状況になったと捉えることもできるので活かして行ってほしい。この計画がそのきっかけになれば良いと思う。

本日多くの意見が出た。将来の農業振興全般に関わる意見もあったと思う。この計画はあくまで農業振興地域の生産基盤の整備に関する計画ではあるが、意見をしっかり記録に残し、今後の農業振興策に活かして行ってほしいと思う。

4 答申案について

会議による意見交換が本日で最後となること、今後の答申から策定までのスケジュール、答申については委員長及び副委員長に行っていただくことについて事務局より説明を行った。

また、今後実施予定の地域からの意見聴取を踏まえて、答申する計画書の内容を修正する可能性があり、その場合の答申内容の修正の可否について、委員長に一任していただく旨を諮った。異議が出なかったため、一任となった。

以 上

第6回 相模原農業振興地域整備計画検討委員会委員出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備 考	出欠席
1	安西 雄次	畜種農家		出席
2	飯島 泰裕	青山学院大学社会情報学部 教授		出席
3	江藤 啓子	公募委員		出席
4	小林 康史	相模原市農業委員会 委員		出席
5	佐藤 はつ子	あぐりレディース		出席
6	竹本 田持	明治大学農学部 教授	委員長	出席
7	坪井 茂治	望地河原開田事業組合 組合長		出席
8	菱山 喜章	相模原市農業委員会 委員	副委員長	出席
9	山野 和重	津久井郡農業協同組合 専務理事		出席
10	山口 功	相模原市農業協同組合 常務理事		出席
11	吉見 敦司	農事組合法人 つ組		出席
12	若生 ひとみ	公募委員		出席